

Nishi Nippon
SHIMAZU
JUNE 7, 2014
P. 27

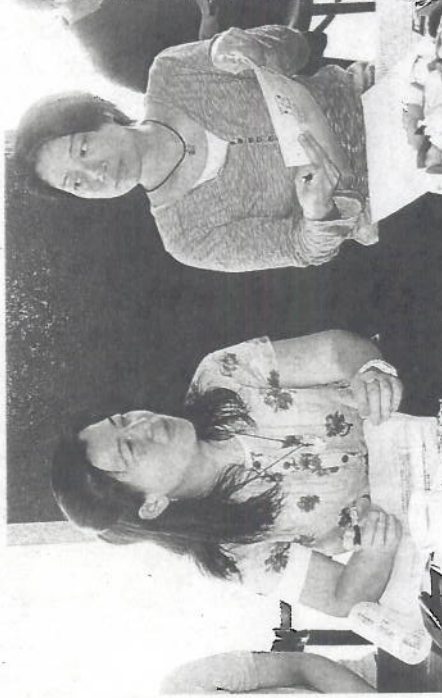
同性カップル子育ても

ヒット中の米映画「チョコレート・ナッツ」は、ゲイカップルの子育てをテーマにした作品だ。同性婚を認めていない日本でも、親になりたいと考える多様な性の人たちは増えていることから、虐待などで親と暮らせない子を養育する里親の新たな担い手に推す声もある。(新西まほ)



うちには二人のお母さんがいます。熊本県内に住む藤めぐみさん(38)は、同性のパートナーと二人の子を育てている。「7年前にこの人と一生を共にすると決めた時、家族をつくりたい

と思うて」。海外の精子バンクを利用し、人工授精で2児を出産した。親しい友人を除き、周囲には父親は県外にいると伝えている。本当は愛する人と子育てをしていると胸を張って言いたい。だが



藤めぐみさん(右)たちが開いている里親制度を考える勉強会

「子どもがいじめられたらどうするの」と反対されれば、親の工口に巻き込むわけにはいかないと思っただ。

「まるで社会にいないかのよう。もっと居場所を増やしたい」。そんな思いから、多様な性の家族が交流する「にじいろかぞく」でスタッフを務めている。

「にじいろかぞく」を4年前に発足させた小野登さん(42)は東京は、同性パートナーと互いの子連れで「再婚」した。3人の子にはありのままを伝え、家庭生活は9年続く。それでも

多様な家族理解を／里親の担い手に

里親として子育てに関われないか。そこで東京都の藤めぐみさん(38)は昨年1月、多様な性の当事者たちと社会的養護を考える団体「レインボー・フォスタ

ー・ケア」を設立した。日本では約4万6千人の子どもが社会的養護の下で暮らしている。欧米諸国では半数以上が里親と生活しているのに対し、日本は工

割で、ほとんどは児童養護施設にいる。国連の勧告を受けて、国は施設の小規模化を目指し、里親の増加も目標に掲げている。法律上、同性カップルが里親になることは可能だ。ただ、認定基準が自治体ごとに定められ、今の運用では男女の夫婦にはほぼ限られる。藤さんは「同性カップルたちが子どもをもつためというより、子どもが家庭で育つ権利のために

周囲からはシングルマザー2人が同居しているこの捉え方をされ、家族とは理解されにくい。小野さんは「全世帯のうち、夫婦と子の構成は今や3割弱。いろんな家族の形があると知ってほしい」と話す。

可能性を模索すべきだ」と語る。昨夏には先行する米国シ

アトルを視察した。実際に里子を育てている当事者や自治体の里親担当職員、支援団体などを訪問。虐待によって男性を怖がる女の子をシズヒアンの家庭に託した例もあり「多様な里親家庭がある方がマッチングしやすい」との思いを強めた。

藤さんたちが専門家を招いて定期的に開く勉強会には、里親も参加している。全国里親会副会長の木ノ内博道さん(64)もその一人で「父母に子ども2人という標準家庭は崩れた。古い価値観に風穴をあけ、もっと多様な家族のあり方を認めていこう」と話す。全国養子縁組団体協会の代表理事で静岡大准教授の白井千晶さん(社会学)は「多様な性への理解が進んでいない現状では、里親や養子を迎えることはハードルが高い。(多くの里子を預かる)ファミリーホームは形態が多様なので、足がかりになるのでは」と提案する。